
Short Story ---**読み切り専門**

海山結季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Short Story - - - 読み切り専門

【Nコード】

N8463U

【作者名】

海山結季

【あらすじ】

キミが僕のヒーローなんだ。

甘く切ないシリアスな恋愛を、読み切り専門で短編集に。キミが好き。それだけで動いた大きな大きなこの気持ちを、どうか受け止めて。

k i s s * 1

101個目の感情（前書き）

記念すべき第一話。

「春樹。愛してる」

受話器越しに聞こえる彼女の切ない声に、彼は一瞬固まった。

アホだろ。それが彼の率直な感想だった。いつもの制服にいつもの髪型、蒸気した頬に薄くメイクされたちよつと小太り女子、桃子。その桃子が玄関先でインターフォン越しに春樹にそう言ったのだ。彼はすかさず我を取り戻すと受話器を置いて玄関を開けた。外は土砂降りの雨だった。傘一つ刺さず、走って来た割には桃子はどこも濡れていない。

「良いから、上がれよ」

様子がヘンだと思うものの、桃子の肩を引き入れようと手を伸ばしたそのときだった。

確かに肩に手をかけたはずなのに、シャランと鳴ったと同時に手に違和感。自分の手を覗きこむようにして見たその先には桃子の大事なネックレスが引っ掛つていた。

「春樹。春樹は？」

「え、は？」

「あたしは春樹を愛してる。もうずっと愛してるよ。春樹は？」

「ちよつと待った、おまえ——」

「待てない。時間ない」

切羽詰まった彼女の切なそうな顔が近づいて来て、唇に触れた温かさ。柔らかくふつくらとした唇は、クラス一太っている可愛い桃子に似合っていた。

「春樹、春樹——！」

その柔らかさに心を奪われていた春樹の耳に飛び込んだ、母親の奇声。次から次へとなんなんだと眉を寄せて瞳を開いたそのときには、桃子の姿は消えていた。

「桃子……？」

咄嗟にポーチに躍り出て、薄暗い外の道に目を走らせた。けれどもそこにはまるで激流の最中を泳いでいるような気分させる、激雨の情景のみ。

「春樹……春樹——ちよつと！」

「——なんだよ。ちよつと待て。今……」

「桃子ちゃん、桃子ちゃんが……！……ああ……、」

階段から駆け下りてきた母親が、一番下で膝を折ってしなしなと座り込んだ。手で顔を覆って、隙間から蒼白の顔面が彼の目に映った。

しばらく黙って立っていた。いや、立ちつくしたと言っても良いだろう。なんとなく頭で理解した。ああ、そうか——と。指先に引っ掛ったネックレスがやけに冷たい。外気にさらされて桃子の熱を完全に忘れたみたいに。

冴えわたる、まるで水を打ったようにしんと静まり返る彼の頭の中。ザーザーよりもジャバジャバとコンクリートを打ち付ける音さえ聞こえない。

「行こう。」

歯ぎしりしてしまうほど固く歯を噛み締めたまま、吐きだした言葉は意外にも冷静だった。

それから20分後。走って行っただのか歩いて行っただのか、それとも車で行ったのか。思い出せないほど果てしない無が続いた先に。桃子は横たわっていた。

「20分前なの。……部屋に忘れ物したからって、……あたし車で送って行くって言ったのに。寄るところがあるからって、自転車に跨ったのを見たの。そう、って送りだしたの。……うっ」

「好恵^{よしえ}。やめなさい」

「だって……だってあなた……目の前で……！」

耳を突きさすような言葉。聞こえないふりなんて出来ない、静かに横たわる桃子の事実。耳に大きな穴が開いて、そこにきんきんに冷えた氷水が流れ込むように痛かった。

おじさんがおばさんを抱えて部屋を出ると、桃子の兄が春樹を手招きした。言われるままにベッドサイドに腰かける兄に横付けした。「顔だけ、綺麗に残ってるから」

散々泣いたのだろう。今からでも泣くだろう。そんな状態で兄は言葉を絞り出した。そつとめくった白い布。視線を下から上へずらす努力をした。努力をしなければ向き合っていられない神経だった。

「……………」

穏やかに笑って、眠る桃子。

彼は気付いた。その頬がいつものように蒸気していないことに。春樹以外の男の子と笑い合っている、その頬は綺麗なピンクに染まらない。それを彼も知っていた。それを知っていて、ブレーキをかけた。まだだと言い聞かせた。それなのに。もう染まってはくれない桃子の頬。

「——桃子。俺が来たんだからもっと喜べよ」

鼻水も垂れ流し、鳴咽もそこに混じった。潤って揺れて見える世界は、今にも桃子の姿を彼の世界から引き裂くように、桃子を連れ去るように残酷に流れた。

涙の一粒一粒に桃子の姿を映し出して、床に流れた。ぽたぽたと顎を伝って落涙するのは、初めての経験だった。

「……桃子、……」

翌日にお通夜があつて、その翌日に葬式が開かれた。

満席に加えてあとからあとから人が波のように押し寄せて、桃子の笑顔を惜しんだ。ふつくらした体つきで満面に笑う桃子を愛していたと、涙を落した。彼はずっと席を動けずにいた。

火葬。棺に大量の花をおさめて桃子の穏やかな顔を最後に覗いた。「俺は、こんなに悲しくて愛しくて寂しい思いをするのは初めてなんだけど」

なんでも一緒に経験をしよう、あのとき誓った約束が彼の頭の中を占領していた。同じ土を踏んで同じ釜の飯を食べて、同じ布団で寝た最高の親友で最高の共犯者。

俺達はいつも、共犯者だった。

小さくて大きい、この世界に何度も挑んでは、100ある感情を全部学んだ。けれども知らなかったのだ。世界に感情が101あることを。

その101は、必ず一人で経験しなければならないことを。

「俺も愛してる。」

悲しさと愛しさを兼ねた、101番目の悲愛なんて、そんな最強のタッグを彼は噛み締めた。これから先どんな人生を歩もうと、おまえと経験しなかった感情なんてない。それだけが、前を向く彼の

唯一の希望だった。

彼にもう、恐れるものなど何もない。首筋を一周して光るネックレスはすでに彼の熱で温かさを放っていた。

k i s s * 1 1 0 1 個目の感情（後書き）

ありがとうございました。

今後も思い立った瞬間、更新します。（笑）

シリアスなものは読み切りに限りますね！

というか今は忙しいためこちらのほうが書きやすいのかもしれない。
ん。ああ、ガンバレ学生！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8463u/>

Short Story ---読み切り専門

2011年7月14日03時19分発行